

135. 昭和59年度滋賀県下における発掘調査の紹介 その4

40. 縄文時代～平安時代の遺物包含層を検出 大津市螢谷地先 螢谷遺跡

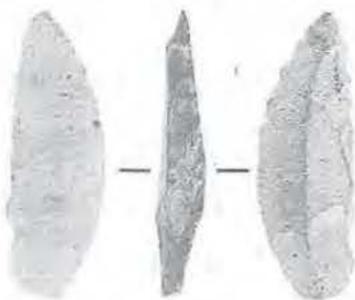
螢谷遺跡は、大津市螢谷地先の瀬田川川底にあって、螢谷貝塚の北東約150mに位置している。

調査は瀬田川浚渫工事に先立ち、昭和59年10月～昭和60年3月にかけて、右岸沖合約50mの地点を、20×50mの範囲にわたって鋼矢板で締切り実施した。

調査の結果、河床下およそ20～50cmで平安時代中期から後期を中心とする生活面を検出し、さらにその下層からは各層序ごとに弥生時代、縄文時代晩期、縄文時代後期、縄文時代早期末～前期、縄文時代早期の各遺物包含層を検出した。

平安時代の生活面には10cm大の礫が全面を覆い、調査区北東角の80・65m(T・P)地点には、約30～50cm大の石材が6個コーナーを持って並び、その横に飛雲文の軒丸瓦が1点出土した。これらの石材には田上山系および比叡山系に見られる花崗岩が含まれ、これらの地域から運搬されたものと思われる。

おもな出土遺物は、旧石器時代では围府型ナイフ形石器が1点あり、最大長11cm、最大幅3.7cmとやや大型である。縄文式土器は、神宮寺式や大川式に併行するネガティブな押型文土器や、尾上式(葛籠尾I式)、穂谷式、茅山式併行の土器がある。早期末から前期にかけての土器群がもっとも多く出土し、石山式とそれに続くと思われる押し文、東海系の木島式併行、北白川下層式土器が見られる。中期、後期、晩期の土器片もある。石器は石匙、スクレイパー、石錘等が出土した。平安時代の層からは須恵器、土師器、黒色土器、瓦器、瓦、土錘などが多数出土し



ナイフ形石器

た他、直径3.9cmの櫛歯文鏡1点の出土がある。

これらの結果から、琵琶湖唯一の出口である瀬田川の形成と、琵琶湖の水位変動を知る上での貴重な成果が得られた。(財団法人滋賀県文化財保護協会 濱 修)

41. 渡来人関係の古墳の調査

大津市滋賀里町 小山古墳群

滋賀里小山古墳群は、京阪電鉄滋賀里駅の北西方約420mに位置する。周辺には、大通寺古墳群(27基)、小山古墳群(4基)が確認されている。滋賀里地区を含む大津北郊地域(錦織～坂本)の山麓には、大小規模の群集墳がみられ、総数約522基を数える。築造時期は古墳時代後期、6世紀後半から7世紀初頭頃と推定されている。それらの古墳の特色としては、かつて大通寺古墳群の調査を行った水野正好氏によって指摘されている。すなわち、横穴式石室の平面形が方形を呈し、立面形がドーム状を示すことと副葬品中にミニチュアの炊飯具セットがみられることなどから、大陸・朝鮮半島と密接な関係があるとして、渡来人の奥津域ではないか、と紹介された。

今回の調査地は、大通寺古墳群と小山古墳群のほぼ中間にあたる地点である。

調査の結果、4基の横穴式石室を内部構造とする古墳を検出した。

古墳番号	全長	玄室長	玄室幅	羨道長	羨道幅	埋葬石	石敷	ミニチュア炊飯具	彩墨
小山5号墳	2.2	?	0.68	?	?	無	有	無	無
6	7.0	?	?	3.5	4.3	有	無	?	両袖
7	4.7	2.2	1.56	2.5	0.93	有	有	?	応片曲
8	8.3	?	?	?	1.40	有	無	カマド・コマ	応片曲



7号墳横穴式石室全景(南から)

以上の古墳の築造年代は、かつて調査された古墳の年代とはほぼ同時期と思われ、6世紀後半から7世紀初頭頃と考えられる。また、大通寺・小山は、巨視的に群構成を復元するならば、1つの大グループが形成されていたことが裏付けられた。その範囲は、標高約150m～110mを測り、その範囲は東西約400m、南北約200mである。その中に、バラエティーに富んだ石室が集中して築かれていることが判明した。

(大津市教育委員会 吉水 真彦)

42. 二時期の寺院遺構を検出

大津市穴太二丁目 穴太廃寺

今回の調査は、国道161号西大津バイパスの建設に伴うもので、昭和59年4月より実施し、これまでに大津宮時代の前後に方位を変えて創建、再建されたと思われる二つの寺院遺構の中心部を検出した。

創建寺院は、中軸を穴太地域の古地割と同じ真北より約35度東に振って造営している。再建寺院造営の際の削平を受けているが、東西12.7m・南北14.0mの西金堂と一辺12mの凝灰岩製壇上積基壇の一部が残存する塔と幅4mの西回廊、幅約3mの東築地跡を確認した。なお西金堂の北西コーナーの地覆石は再建講堂の基壇南東コーナーと重複しており、回廊は講堂の下を潜って北へ延びている。伽藍配置は南滋賀廃寺と同様の川原寺式をとるものと考えられる。

再建寺院は、創建寺院を解体して大津京造営とかかわるとみられる古地割にはほぼ一致する、真北から約2.4度東に中軸を振って造営している。西に東西23.04m、南北19.14m、高さ1.4m以上の瓦積基壇の金堂、東に一辺14.0m四方の塔、北に東西28.21m・南北15.44m、高さ0.5mの講堂、講堂東に経藏跡、僧房跡等を検出した。伽藍配置は法起寺式と考えられ、講堂は礎石、基壇とも完存しており、身舎内の須弥壇跡より銀製押出仏、施釉陶器、泥塔、塑像螺髪等が出土した。金堂はかなり削平されているが礎石抜き取り痕より奈良県山田寺と同じ特異な構造の建物である。塔と金堂は奈良時代末に焼失しているが、講堂は平安時代初期まで存続している。



調査区全景

以上のように、極めて保存状態の良い寺院跡であるが、今後、大津北郊の地域史はもとより、古代寺院の成立、大津京成立時の諸問題の再検討をうながす重要な資料を提示する貴重な遺跡である。

(滋賀県教育委員会 大橋信弥)

勸滋賀県文化財保護協会 仲川靖・氏丸隆弘)

43. 中世の町家跡

大津市下阪本四丁目 坂本遺跡

今年度の調査で検出した遺構は、町家跡とみられる建物跡と、これに付随する井戸・石室・石組み溝などである。これらが短い期間で建て替え、新設されている。今年度は計5枚の遺構面を検出・調査したが、部分的な深掘りを行ったところによると、あと2枚の遺構面が存在する。

これらの遺構は、おおむね15世紀中頃から16世紀後半までのものである。建物は長屋風で、出土遺物に輸入陶磁器(李朝・明)や多数の渡来銭、各地の陶器が含まれていること、中世の下坂本が湖上交通の要衝として商業活動が盛んな地であったことなどから、性格は商家と考えられる。建物の棟方向や杭列の方向はN33°Eで、穴太以北の自然傾斜に従った条里地割の方向と一致するものである。



坂本遺跡第4遺構面

建物の配置、間取が、比較的よくわかる第3・4遺構面によると、間口4m前後、奥行5m前後である。『洛中洛外図屏風』にみられる中世末期の町家も間口2間か3間、奥行2間と狭い、中世末期における町家が構造的には平安時代よりも進みながら規模が小さくなるのは、応仁の乱後の疲弊がなお充分回復していないことを示すものであろう。

この遺構面の他の主な特徴は、壁下地の木舞竹が良好に遺存していること、路地とみられる箇所のあること、小型の井戸が建物の中に造られていることなどである。

町家跡とみられる当遺跡から出土した遺構・遺物は中世末期の坂本の繁栄ぶりを示すとともに、全国的にみてもこの時期の庶民住宅跡が調査で発見された例はほとんどなく貴重な資料といえる。

(大津市教育委員会 栗本 政志)

44. 江戸時代中期の坊跡を検出

大津市坂本町 延暦寺北谷善学院跡

本調査は、比叡山延暦寺の総合防災工事に伴う現状変更にかかる事前調査の4年目にあたる。今年度は北谷地区と根本中堂から本願堂へいたる部分を調査した。

根本中堂前面と総持坊前面、本願堂南平坦地では江戸時代後期の暗渠跡、階段を確認した。

北谷地区では、標高約650mにある約1000m²の平坦地に昨年度と同様江戸時代中期の遺構を確認した。

検出した遺構は、平面形がコの字状をなす建物と、それに付属する蔵と考えられる建物からなっている。

礎石には、矢穴痕がある花崗岩の切石の他に、約20～50cmの平坦な石や、室町時代に使用されたと考えられる円形の礎石も認められた。中には、焼けた石も存在している。

今年度の調査地点は遺構の保存状態が良く、一辺約30cmの六角形を呈し東に焚き口があるカマドや普段使用するものと客用の大と小用の区別がある雪隠などを検出した。

古絵図と照合した結果、本年度の調査地点が「善学院」跡、昨年度の調査地点が「善光院」跡と考えられるにいたった。

遺構の年代は18世紀で、昨年度調査した「善光院」と比べ、「善学院」は規模も大きくかなり手の込んだ建物であることから北谷の中心的な坊跡であると考えられる。

建物自体は坂本に点在する里坊と非常によく似ている。坊跡遺構は全国的にも例が少なく、里坊の変遷を解明するうえで貴重な資料として注目される。

(朝滋賀県文化財保護協会 氏丸 隆弘)

45. 古墳時代の鉄器を検出

今津町福岡地先 妙見山遺跡

高島郡今津町にある独立丘陵の妙見山は、山中に数多くの古墳を見ることができる。161号線バイパスがこの丘陵の一部を通過することになり、59年度より、発掘調査にはいった(調査対象面積、幅約60m、長さ約500m)。



カマド検出状況



2・3号墳



掘立柱建物跡

予定路線では妙見山に位置する古墳群の主群(丘陵上に直径20m以上を測る古墳が点在する)からははずれているのであるが、支群とも言える直径10m程度の円墳は路線上に、現地表面で確認されるだけで12基ある。これ以外にも、丘陵内が以前に整地分譲されており、マウンドが消滅したものがあると思われる、さらに多くの古墳が存在すると思われる。路線北側では丘陵部からはずれ、平坦面(旧水田)となり、住居跡、あるいは、北西方向に位置する王塚関係の遺跡(近くでは場整備に伴う調査では数基の古墳を検出している)が存在する可能性がある。

59年度は試掘調査であり、古墳を確認した所を除き、予定路線センターライン上に幅約2mの試掘トレンチを連続して、また適宜これに直行するトレンチを設け調査を行った。結果、多くのトレンチでは遺構・遺物は検出されず、耕地への転換に伴う整地が、予想以上に多くの削平を伴うものであったと思われる。北側の一段高い面においては、遺構・遺物の確認がされ(ただしここでも包含層と言えるものは削平されており、地山に切り込んだ遺構のみ検出された)溝状遺構から、古墳時代の鉄器(鉄刀、鉄斧、槍ガンナ、鉄鏝)を検出した。

古墳は2基を対象に調査し、小規模な横穴式石室を確認している。今年度から本調査に入り、今後の成果が期待される。(朝滋賀県文化財保護協会 横田 洋三)

46. 数時期にわたる官衙遺構

今津町日置前 日置前遺跡

日置前遺跡は、昭和57年度は場整備事業に伴う事前調査で発見された遺跡である。当遺跡は箱館山東麓に広がるなだらかな扇状地上に位置し、眼下に琵琶湖、竹生島を見わたすことのできる景勝の地である。又南に若狭街道、東に北国海道が走る交通の要衝でもある。

昭和58年度にII次調査を行い、本年度調査はIII次にあたる。I次調査では遺跡の南部の低湿な地域から木杵、倉串、木盤等の他「諸上内」と墨書された土師皿が出土している。II次調査では、その北側にあたる広い範囲で柵・溝で区画された一町方格の区画施設2つと、70棟近くの掘立柱建物が検出された。これらの遺

構群や出土遺物から、官衙の性格を強くもった遺跡であることが確認されていた。

本年度はⅡ次調査の東側にあたる200,000㎡を対象に調査を行った。その結果、遺跡の性格、広がり、解明する上で興味深い成果を得ることができた。Ⅲ次でも昨年と同じN3°Eに主軸をもつ柵・溝・掘立柱建物が検出された。その結果、本遺跡が柵・溝等で整然と区画された東西8町、南北5町にわたる官衙域をもつことが明らかになった。掘立柱建物は、本年約80棟検出されたが、これらは大きくV期に分けることができる。Ⅰ期～8世紀前半代、Ⅱ期～8世紀中葉代、Ⅲ期～9世紀前半代、Ⅳ期～9世紀後半～末、Ⅴ期以降～平安時代後半～中世のものである。この中で最もまとまった形で検出されているのはⅡ期の建物群で、柵と同じく主軸方向をN3°Eにもち全域で検出されている。官衙域の中心と思われる部分から、3棟の大型建物が検出されている。これらは、一辺1～1.6mの方形掘方をもつ東西3間×南北5間、2間×6間、5間×2間の建物群である。また官衙域の外側には、Ⅱ期と同じ主軸方向を持つ多数の掘立柱建物、竪穴住居が検出され、近接して集落が存在していたと考えられる。

(今津町教育委員会 葛原秀雄、江南久美子)

47. 縄文時代末期～弥生時代の墓地跡

今津町北仰 北仰西海道遺跡

北仰西海道遺跡は、北仰区多目的研修集会所施設建設及び、ブランド造成工事に伴い、Ⅱ次にわたり調査を行った。調査地は、前年度県教育委員会によって調査が行われた同遺跡の南東100mに位置している。

今回の調査で検出された主な遺構は、縄文時代晩期の甕棺墓35基、ほぼ同数の土壇墓、ピット群、弥生時代中～後期の方形周溝墓3基、後期の壺棺墓1基などである。又、包含層からは、石鏃、石斧、石皿、磨石凹石、石棒、管玉などの縄文時代の多量の石器類、縄文晩期終末の2条突帯文の深鉢片とともに弥生時代前期新段階の壺、甕等が出土している。

縄文晩期の甕棺墓は、ある程度まとまりをもった形で検出されたが、現在整理中で改めて報告することにし、ここでは、比較的遺存状態の良い24例について

タイプ別にみると、単棺墓9例、これに別個体の甕の大きな破片を被せ蓋としたもの7例、甕と鉢あるいは甕の大小で合せ口になっているもの6例がある。これらの甕棺は、口縁部を上方にし直立、斜方向に埋置するもの、水平あるいはそれに近い状態に埋置するものがある。

甕棺として使用された土器は、晩期の滋賀里Ⅲ～Ⅳが主体となり、Ⅴに属するとみられるものも数例ある。

又、全ての甕の内、外面には、炭化物やススの付着がみられ、日常の煮炊きに使用した甕を転用したものと考えられる。

次に墓域内で特殊な意味をもつと考えられるものに棺内にヒスイの管玉をもつもの、拳大から人頭大の7個の自然石を入れ、抱石葬的な性格をもつものなどでこの他に甕棺を埋置する掘方が、かなり余裕をもった長方形の土壇内に入れるものが数例ある。

(今津町教育委員会 葛原秀雄、江南久美子)

48. 方形周溝墓・横穴式石室墳・中世古墓などを検出

新旭町平井 平井遺跡

西部運動公園造成に伴う調査で、調査対象地となった新旭町を一望できる台地上にはⅡ形に区画をもつ濠が以前より確認されていた。この付近は、通称御坊山と呼ばれており、調査にあたって現地表面より多量の瓦の散布が見られている。そのため当初、寺院、館跡が想起された。調査が進むにつれて台地東縁部で方形周溝墓2（両者とも8×8mの周溝は全周せず、南および東側を欠く。北西コーナーに陸橋をもつ）、横穴式石室墳（周溝を有する南に開口部をもつ。長方形プランをとる玄室内においては拳大以下の礫が敷き詰められており、6世紀後半と推定される器台、杯身、杯蓋、広口壺、短頸壺、高杯、甕などが検出された）、奈良時代の竪穴住居2（両者とも4×4mの方形、南東隅にカマドをもつ）などが検出された。なお区画濠中央部付近において、中世古墓が確実と思われるものだけで2基確認された。両者とも3×3mと大型の方形プランをもつものと思われ、河原石を積み重ねて構築されている。和鏡、刀子、瓦製経筒、転用蔵骨器と思われ



甕棺墓



横穴式石室



古墳検出状況

る越前、信楽の陶器が出土している。基底を大きめの石で配石、積み上げていった後、小振り石を寄せ集めている様である。区画濠等の性格については、現在も調査継続中のため報告は次の機会に譲る。時代の流れの中において、この付近は墓域—居住域—墓域と繰り返し、現在平井地区の共同墓地として活用されており、これから先、運動公園となりさらにその様相を変えて行くとしている。(新旭町教育委員会 関高志 長井秀之)

49. 6世紀末の円墳2基

新旭町木津 波爾布神社前遺跡

木津地区は場整備事業に伴うもので、今回調査対象地は美園遺跡より400m程西方の式内社波爾布神社前に位置する。この周辺には、大塚古墳群、健速神社古墳群と後期古墳が群在している。今回も第2調査地において円墳2基が確認された。

1号墳—南東部に開口部を向けた左片袖式横穴式石室墳で、調査地最北に位置する。周濠幅2mを測り全径約20mとなる。濠の断面形態は舟底状を呈する。主体部については羨道部が削平されているが、玄室部、長径4.5m、短径3.5mを測る。なお周濠床直上より6世紀後葉と思われる埴が出土している。

2号墳—南東部に開口部を向けた横穴式石室墳と思われる。1号墳の南西約5mに隣接する。周濠は全周せず、おそらく1号墳と共有するものと思われる。出土遺物から6世紀末—7世紀初頭と考えられ、1号墳が若干、先行するものと考えられる。また第1調査地において掘立柱建物2棟検出された。いずれもN—22—Eの方位をとり、美園遺跡建物2群に比定され9世紀頃かと思われる。今回まとまった遺構は確認出来なかったが、現在整理進行中につき詳細は、後に報告する。

この一帯は、後期古墳が群在しており、その背景となった遺営基盤が今後の問題点となるだろう。

(新旭町教育委員会 関高志 長井秀之)

50. 弥生時代～古墳時代の集落跡

新旭町針江 針江北遺跡

今回調査を実施したのは針江北遺跡の北側で、昭和57年度に調査した残りの部分である。調査区のはほぼ中央を流れる用水路を境に南側をC地区、北側をD地区、E地区とした。C地区からは上下2層の遺構面が検出された。上層からは6基の土壇と溝および木棺を伴う土壇墓等が検出された。年



竪穴住居群



調査状況

代は弥生時代後期～古墳時代初頭にかけてのものである。下層からは弥生時代中期の用水路跡と思われる護岸を施された溝と、沼地状の遺構が検出された。針江北遺跡は低湿地に立地している為湧水が激しく、明確な遺構は検出されなかったが、近くに水田等の耕地の存在が考えられ、この備えもそれに伴う可能性のあることは想像に難くない。

E地区はC・D地区とは異なり、遺構は氾濫原と思われる砂礫層上に立地している。検出された遺構はいずれも弥生時代後期～古墳時代初頭にかけてのもので掘立柱建物8棟、竪穴式住居12棟、土壇48基、溝1条、溝4条である。遺構はE地区とD地区の境にある大溝の北側に集中しており、この溝をもって住居空間と他空間(墓域・生産域等)に区分されているものと考えられる。また、この大溝からは鋤・杵等の木製農具類が出土していることから、この集落が低湿地農業を営んでいた可能性が強い。遺物は同時代の土器類を中心に多量に出土しており、その中にはミニチュア、赤彩の施された土器、鳥形と考えられる木製品等が含まれる。

当初針江北遺跡のような低湿地帯からは集落の検出は予想されていなかったが、水はけのよい氾濫原という特殊な条件下においては、低湿地においても集落が立地し得ることが今回の調査により証明された。

(勸業県文化財保護協会 吉谷 芳幸)

51. 弥生時代中期の石剣

新旭町針江 針江南遺跡

本遺構は、針江大川を北限に南は霜降と深溝を結ぶ県道にまで広がる。本遺跡については昭和57年度の試掘調査で、上層に平安時代、下層に弥生時代中期の遺物包含層および遺構が重複していることが明らかになった。今回の調査地は、昨年度全面積の約1/3を調査したにとどまったB地区残り約1/3が対象地である。

基本層位は、第1層・表土(耕土)、第2層・暗茶灰色粘質土層(遺物包含層)、第3層・青灰色粘質土層からなり、各層の厚さは第1層約40cm、第2層約20～30cmであっ

った。このうち第2層中には、弥生時代中期の土器と平安時代の灰釉陶器や緑釉陶器、須恵器、土師器などの破片が混在する。この第2層を除去すると、第3層の上面で遺構が検出された。

遺構としては、溝、土坑、旧河道などが検出された。遺構の内、溝(SD4)からは、弥生時代中期の土器などと共にはは完形品の鉄剣形石剣が1点出土した。この石剣は、長さ21.5cmで幅は刃部で2.4cmを測り、材質は頁岩である。一方遺物では、弥生時代中期の甕、壺などと共に蓋形土器、円板状土製品が出土している。蓋形土器は、笠形で突起状のつまみをそなえ、欄描文を施し、直径9.9cm、周縁に2孔の紐孔をあけている。円板状土製品は、直径5.6cm、厚さ0.6cmで甕か壺の体部を再加工して作られている。(嗣滋賀県文化財保護協会 尾崎 好則)

52. 荘園管理の建物群

新旭町正伝寺 正伝寺南遺跡

昭和57年度、58年度より継続し、北地区に向かって調査範囲を進展させ、本年度をもって予定地総ての調査を終了した。

昨年度に当遺跡における遺構立地の在り方が4大別されることを指摘した。(滋賀県文化財だよりNo85 1984)今年度の調査では、北地区に見られる遺構、遺物群が、昨年度調査によって検出された古代末頃の建物群の立地する礫面付近まで広がっていることが確認され、これを含めると5大別することができる。

この北地区等は湧水点の浅い湿地であり、以南の上層礫面に見られる古代末から中世にいたる遺構は全く検出されず、表土下約1.5m～2mの下層において、古墳時代前期の氾濫流路及び関連して形成されたと想定し得る生活遺構を伴わない土器溜まり状遺構が検出された。この各土器溜まり状遺構内出土器の器種構成を明確にし、比較検討を加えたときに得られる資料は、湖西地方の古式土師器研究における一試金石となる期待がもたれる。

昨年度に検出された12世紀代後半から13世紀代にいたる建物群は更に広がる様相を呈し、予定地内に限っ



土坑内遺物出土状況

ても約15棟の掘立柱建物が検出されている。ほぼ同一方向に軸線をとる建物群は、3～4に区画することが可能で、荘園盛行期から武家社会への胎動を迎えるこの時代の荘園管理体制の一端が窺知される。

(嗣滋賀県文化財保護協会 清水 尚)

53. 秦氏と関連の木簡出土

高島町永田 永田遺跡

永田遺跡は、高島町大字永田に所在し、上永田集落内に中世の高島七頭(佐々木氏)の一人、永田氏の居城である土塁が残されているところから永田遺跡と呼ばれている。

今回、上永田周辺で県営のは場整備事業が行われることになり、永田城の近くも実施範囲であるので、埋蔵文化財調査を滋賀県教育委員会より高島町教育委員会に依頼され、昭和59年の秋より本調査にのぞんだ。

調査は、当初目的であった中世の永田氏関係の遺構・遺物等は少なく、かわりに9世紀初頭の遺構・遺物群で多くの成果を納めることができ、今後、高島郡内の古代社会を考える上で、貴重な資料を提供できると考える。以下、簡単に検出された遺構と出土した遺物について説明する。

B2・9トレンチと呼んでいる調査区が一番バラエティーに富んでおり、井戸2基、掘立柱群等々がある。出土遺物は帯金具の鈔帯(銅製)で鉸具・丸駒・巡方や和同開珎・神功開宝、9世紀前後の土器類・木器類などである。他に、奈良国立文化財研究所で解説していただいた木簡と墨書土器がある。

木簡は25×3.9×0.4cmの付札の半分で、『口田廣濱秦^{アノ}人^ノ酒^ノ公^ノ 秦^{アノ}廣^ノ嶋^ノ 口^ノ口^ノ継^ノ口』の文字が読み取れ2名の人名が確実に見受けられる。墨書土器には「媛」・「志津」が記されている。

遺跡の性格としては秦族となんらかの関係を有する人物の居住地であろうと考えられ、数十年後に設定される遣唐大寺の高嶋山作所ともかわりがあるものと推測される。(高島町教育委員会 白井 忠雄)



鈔帯(銅製)と貨幣